

岡成志しげゆきの「大陸新報」連載小説『神戸の女』について

山 本 歩

一、岡成志の経歴と作風

本稿は岡成志の小説『神戸の女』を取り扱うことで、岡の文芸活動の性質、並びに日中戦争下の娯楽小説の一例を確認することを目的とする。

大正〓昭和期にかけて新聞記者およびユーモア小説家として活動した岡成志——その知名度は今日、高いとは言いがたい。しかしながら、とりわけ神戸在住時の文筆活動は文化的に見るべきものがあり、今後注目されるべき人物と言えよう。

岡は一八八九年、岡山県生まれである。号は「咄眼とつがん」、これは自身のぎよろ目（凸眼）に由来するようだ。記者として「岡十津雁」「十津川亭雁行」などの筆名もしばしば用いた。岡の名は従来、主に谷崎潤一郎の友人として取り上げられてきた。朝日新聞神戸支局の記者として活動していた岡は、一九二三年、震災のために関西に避難してきた谷崎を補佐するため、新聞社から派遣され知己を得たのである。

谷崎の岡に対する印象は一貫して、好ましいものではなかった。例えばその第一印象について、後年「三つの場

岡成志の「大陸新報」連載小説『神戸の女』について

合」で次のように記す。

私が岡さんから受けた第一印象は、あまり風采の上らない、英語で云へばアムビギユアスとでも云ふのだらうか、曖昧な、旗幟不鮮明な容貌の、どちらかと云へば鈍感な、言葉に岡山訛りのある、気の利きさうもない人物、と云ふに尽きる。(1)

概して鈍物との評である。一方で、この頃の岡は大阪朝日新聞の神戸版付録の文芸欄「雑草園」の中心として、神戸の文化を牽引しようとする意気込みも強かった⁽²⁾。あるいは谷崎の補佐もそうした活動の一環だったのだらうか。決して鋭敏な人物ではないが、バイタリティーには溢れていたのだ。

以後の岡の経歴を、大谷晃一『仮面の谷崎潤一郎』⁽³⁾を参考にしつつ、簡単にまとめておく。なお、谷崎「三つの場合」における言及をへゝ内に引用している。

一九二四年

この頃、岡本に移転してきた谷崎潤一郎と交流を密にする。

一九二六年

一月末。岡山県から衆議院補欠選挙へ出馬、落選。立候補のために朝日新聞社を退社。(その退職金を以て出たのであるが、得票が法定数にも達しなかつたので、供託金も没収される始末であつた。)

五月。神戸又新日報へ入社。

七月二十四日。谷崎を招き、須磨離宮近くの有坂忠平邸にて、「須磨ぢうの風を一室に充して芸術家達の楽しい夕」を催し、「神戸又新日報」の記事とする。(集つたのは私の外に中国人の鮑少游、妻と令嬢、故米窪満亮氏、

奥屋熊郎氏、亀高文子氏、岡成志氏、有坂夫妻と令嬢等々（傍点引用者）であった。

一九二七年

五月八日。やはり谷崎を招き、「十人の夫人の愉快な集ひ」を催した。「神戸又新日報」の記事では谷崎を「この作家は悪魔主義者でも徳望家でもなく話の面白い世間なれた四十すぎのおつさん」と紹介。

一九二九年

四月。関西中央新聞社へ移っている。谷崎に依頼され、古川丁未子を同社へ斡旋（谷崎と丁未子は一九三二年に岡の仲人で結婚）。

一九三〇年

二月。大阪第一区から衆議院選挙へ出馬、落選。

△「どうです形勢は。当選しさうですかね」と、事務所に詰めてゐた二三人の運動員に声をかけると、みんな顔を見合はせて、

「さあ、いや」

と云つたきり、寒さうに火鉢を囲んでゐた。こんな淋しい、不景気な選挙事務所つてあるもんぢやないと思つたが、結果は前回同様惨敗であつた。△

九月。神戸又新日報へ戻る。

一九三三年

五月。又新日報退社、金沢北国新聞の主筆となる。神戸を去る。

一九三五年

岡成志の「大陸新報」連載小説『神戸の女』について

岡成志の「大陸新報」連載小説『神戸の女』について

一九〇

北国新聞退社。(以米岡さんは新聞記者を止めて文筆を以て生計を立て、ゐたと云ふが、何処にどんなものを書いてゐたか、大して花々しいことはなかつたらしい。)住居は世田谷、中野、杉並区と転々とする。

一九三六年

佐々木邦がユーモア作家倶楽部を結成、その一員となる(他に辰野九紫、徳川夢声、サトウ・ハチロー、獅子文六ら十五名)。

一九三九年

四月より「大陸新報」に『神戸の女』連載。

一九四〇年

一月? 有楽町駅で空襲に遭い、至近弾のショックから衰弱。

三月。谷崎へ津山疎開を薦める。自身も月田へ避難。

五月。心臓脚気で重体、後に死去。葬儀は二十三日。戒名「法性院清章咄眼居士」。

さて、前述のように、岡は記者として神戸の文芸振興に力を入れつつ、やがて自身もユーモア小説家として創作を行っていくことになる。谷崎曰く「大して花々しいことはなかつたらしい」それらの仕事は、今日ほとんど言及されない。しかしながら阪神間の文芸文化を検討する上で、看過すべきではないものとも思われる。谷崎は「三つの場合」で、岡の文筆業について次のようにも書いている。

仕事の舞台が主として神戸であつたから、東京ではあまり文名を知られてゐないが、著書も数種出版されてゐる。中で一番阪

神戸方面の読者に受けたのは、大阪当時の創元社から出版された「女心風景」であつたらう。これは岡さんが又新から関西中央新聞に転じた昭和の初年頃、同紙に「婦人読本」と題して毎日一篇づ、掲載したコント風の短文を一冊に纏めたもので、いかにも阪神間のマダム連に好かれさうな書き方をしてゐる。

一九二九年の『女心風景』は正確には改善社から発刊された。谷崎はこうした出版物の読者層が「阪神間のマダム連」——少なくとも中産以上の階層であつたことを証言している。その読まれ方、娯楽性についてはまた、次のように説明される。

こんな調子でコントに出没する人物はすべて変名になつてゐるが、いづれもレッキとしたモデルがあつて、架空の人物は一人もゐないらしい。あ、これはあの人のことだなと一々思ひ当るのが、夙川蘆屋一帯の読者層の興味の一つにもなつてゐた。岡さんもその辺の呼吸は心得たもので、いろ／＼書くには書くけれども、決して紳士淑女たちに辛辣な迷惑を及ぼすやうな素ツ破抜きはやらない。大概奥さんやお嬢さん方に喜ばれさうな、華美で甘つたるい描写ばかりである。そして岡さんの手にかゝると、出て来る奥さんもお嬢さんも例外なく派手な身なりをした、上品で色つばい美人になつてゐる。

神戸という狭い範囲で、内輪に向けて書かれた小説。谷崎による評価の、その妥当性はともかくとして、岡が近辺の人物をモデルとして登場人物を造形し（出来事をモデルとしているわけではないと思われる）、その方法がまた読者の興味を引いていたことを確認しておこう。すなわち、サロンのな、極めて地元密着型の創作であつたため、作家として全国的な「花々しい」業績は得られなかつた。しかし、そうした活動は恐らく、地域住民と文芸文化を結びつける働きもしていたのではないか。

既で紹介した通り、岡は一九三三年に神戸を去る。本稿で扱う『神戸の女』は「神戸」を題しながらも、それより

も後、一九三九年に連載されたものである。

二、「大陸新報」連載小説『神戸の女』

日中戦争が長期化の様相を呈する一九三九年一月一日、「大陸新報」⁽⁴⁾は華中・上海における邦字新聞として創刊された。陸海軍、外務省、および前年十二月に設立された興亜院の後援による、明確な国策新聞であった。従前に存在した軍報道部による華字新聞「新申報」を姉妹紙として合併し、上海における報道の中核として機能することとなる。主な読者は租界に住む邦人であったが、「新申報」合併からもわかる通り、陸海外務三省の目論見は、中国民衆を讀者として巻き込み、啓蒙することにもあつたと思われる⁽⁵⁾。

単に政治・軍事報道のみではなく、むろん文化的な記事も存在し、新聞小説の連載すらあつた。『神戸の女』は夕刊の連載小説欄に、一〇一号（一九三九年四月十四日）～一六八号（六月二十日）にかけて掲載された小説である。作者は岡成志、挿絵は石川義夫の手になる。また、連載に先駆け、一〇〇号に「作者の言葉」が掲載された。ここに全文を引用しておこう。

上海や神戸のやうな国際都市に住んでみますと、西洋人の風俗や所作が別に珍しいとも思はれないのですが、それでも、西洋の婦人の高くとんがった鼻を見ますと、なんだか人を小馬鹿にしてゐるやうに思はれます。しかし、西洋の婦人につき合つて見ますと、矢張り女は女で、優しい所もあり、人情のこまやかな所もあることがわかります。そして、男同士は四角張つて張り合つてゐても、女同士はすぐ仲よしになつてしまひます、多分着物の柄やお化粧の仕方など共通した興味の話題がいくつでもあるからでせう

私はこのやうな女と女との交際を、長年の神戸生活で見てをります。ことに、少しでも外国語のわかる婦人は、男よりも早

く、深く、外国人と仲よしになるやうです

私は「神戸の女」にこのやうな、国際的な女同士の交際を描いて見たいと思ひます。そして、外国人に好かれるインテリ夫人も、自分の家庭ではほんの少しヒステリックでもある平凡な奥様で、年中愛する良人といがみ合つてゐる、と云つたやうな「神戸の女」を、皆様と一緒になつかしみ、親しんで見たいのです

たゞこれだけの、いはゞ私の好みから生れた小説ですから、筋だのテーマだのにハッキリしたものが感じられないかも知れません。然し何となく、その日その日を五分間ほど楽しめる読み物として気軽に見ていただくわけには行かないでせうか——出て来る二、三の支那の人に実在の人名を拝借しました。しかも昔のお友達です。きつと支那のどこかに無事に暮らしてゐらつしやること、思ひます。少し歪められた御自分の姿を何かのはづみに、この新聞で御覧になりはせぬかと、はかない望みを持つてでは、近日から書き初めませう——ジリ・ジリ・ジリ（ベルの音）

「作者の言葉」からは、幾つかのことが看取できる。まず作者は、「上海と神戸」を同じ「国際都市」として認識していること。この「国際都市」という言葉によつて、元来無関係と思われる新聞発行地の上海と、作品世界の神戸が結びつけられているのだ。次いで、「西洋の婦人」は一見日本人を「小馬鹿」にしているようだが、「優しい」「人情」があつて、女同士であれば国の垣根を越えて「仲よし」になれること。外国人と仲良くなれるような婦人も、家庭では「年中愛する良人といがみ合つてゐる」こと。また作者の執筆動機としては、そのような「神戸の女」を、読者と共に「なつかしみ、親しんで見たい」とある。さらに、中国人の登場人物に実在の人名を使用しており、それを本人が目にするのを「はかない望み」として語っている。先の谷崎の言に相応するモデルの採用であり、かつ中国民衆をも読者層として想定した「大陸新報」の性格を把握した上での記述と言えよう。

作品内容については、ほとんど知られていないと思われるため、ここに紹介しておきたい。第一回は次のように始まる。

神戸の元町を午後二時頃ぶらつくくと、二十五ヶ国の女が見られると、これはある新聞記者の書いたヨタですけれど、まさか二十五ヶ国は数へられないにしても、その半分見当の国々の女たちがシヨウ・ウキンドウを覗きながら、日本ムスメの華美な帯を振り返へつてまで眺めながら、のんびりと歩いてゐるのが見られるでせう。(1)

舞台は当然、神戸に終始する。特に六甲の住宅地が主舞台となる。時期は不明だが、明治四十五年生まれとされる主人公やす子が、二十代後半〜三十代の婦人たちと対等に会話していることから推察すると、昭和十四年当時にさほど遠くないと思われる。

続いて、主な登場人物を羅列する。

【山田やす子】

洋裁の先生。「西洋婦人と並んでもひけをとらないどころか、色の配合もスタイルの好みも、ピンと目立つて上品なくらゐ、すつきりした服装の美人」。明治四十五年二月七日午前五時生まれとある。少し気弱な性格で、周囲の女たちに振り回される。

【山田三郎】

やす子の夫で、洋画家。やす子とは親友同士のように仲が良い。鮑に中国の絵入り小説を借りて読むことが楽しみ。美男とされているが、鮑、宮野姉妹など、何かと気が多い男性。

【アン】

豪州人。「二十六、七に見える口のはでに大きい、頭の鋭さうな婦人」。幼い頃から神戸で育てられ、カナディアン・スクールを出ている。「どこか擦れつからし」なところがあり「人を小馬鹿に」する傾向がある。残忍な性格で、

ワーター家の飼い犬を弓矢で虐待する。終盤、上海で従兄弟と結婚。

【メリー】

カナダ人。「年の三十一か二らしい、ほんのり頬にそばかすの見える上品な婦人」。アンと同じカナディアンスクールを出て、同居している。アンに比べると幾分か常識人。

【鮑曾麗詮】

「鮑さん」と呼ばれる。中国人の「アマさん」（阿媽＝家政婦）。上海の葉屋の娘で「インテリの美しい、二十八歳の女」。強気な性格で、当初アンとメリーのもとにいたが、喧嘩をして辞職、山田家に勤めることになる。三郎を巡って、やす子と水面下の小競り合いを行う。読書家で、中国の伝承・迷信に詳しい。

【サハイ夫人】

インドの貴族出の若い婦人。神戸在住西洋婦人の社交団体「ウーマンスクラブ」幹事。変わり者のインド人を紹介するのが趣味。

【ワーター】

オランダ人土木技師。ピアノが得意。冒頭ではやす子に気があるそぶりを見せるが、後によし子に入れ込むことになる。

【ワーター夫人】

肥満体の婦人。日本語が上手ではない。何でも物を借りっぱなしにする癖があるので、アンに恨まれている。

【宮野千代子】

三郎の絵のモデルとして山田家に入入りする美女。

【宮野よし子】

千代子の妹で、宝塚歌劇団所属。「宝塚少女のうちでは一番と下らぬほどの美しい容貌の持ち主」。ワートルや三郎に好かれる。本性は「こまつちやくれた」性格であり、終盤、ワートルと親しく交際し、様々な金品を貢がせる。

日・中・豪・加・印・蘭と、様々な国籍の人物が登場するが、その内容は女性同士や夫婦間の確執や、浮気的一幕である。大きくは、やす子―三郎―鮎さんの三角関係、三郎とワートルがよし子に翻弄される様、以上のためにやす子と三郎の間に起こる不和が、物語の中心となっている。あらずじだけを、次にまとめておこう。

【1～15】

山田やす子、アン、メリーは共に六甲の住宅地に暮らす仲良しの三人。アン・メリーの家政婦である鮎さんも三郎と仲が良く、山田家に入入りしている。ワートル家の飼犬「ライオン」を憎んだアンは、やす子に毒殺を依頼するなどしていたが、結局自分で虐待することに決める。先端をガーゼで覆った矢で犬を虐めるうち、鮎さんが腹を立て、その弓矢でアンを射ってしまう。そのかでアンと喧嘩した鮎さんは辞職、山田家に雇用を迫る。やす子は三郎と鮎さんの関係に内心やきもきしなくてもなかつたが、彼女を月十二円で雇ってしまう。

【16～21】

三郎のモデル・宮野千代子が、妹のよし子を伴ってアトリエにやってきた。三郎は彼女らにワートルを紹介したが、ワートルは「文楽の人形芝居」を模して二人の手足を掴んで動かす遊戯を提案。ワートルと三郎は思うさま姉妹に触れ陽気になるが、鮎さんがやす子に密告してしまう。夫婦喧嘩になるところをワートルに仲裁される。翌日、サ

ハイ夫人がやす子に占い師を紹介する。占い師はトランプ占いで「支那の人」がやす子を邪魔しようとしている、と忠告するのだった。

【21～28】

便秘になったアンの看病のため、鮎さんはアン家と山田家をかけ持ちすることになった。かけ持ちの件で不機嫌になる三郎とやす子の関係は徐々に険悪になっていく。ワートルはワートルで宮野姉妹を自宅に連れ込み、歌と踊りで楽しんでおり、何やら不穏な空気が漂い始める。

【29～38】

鮎さんとやす子が行軍将棋で対決、鮎さんのイカサマを逆手に取り、やす子は勝利する。二人の間の小競り合いが表面化し、ある日鮎さんが、やす子の生年月日を書いた呪いの人形を土に埋めていたことが発覚する。傷ついたやす子は三郎と口論するが、やす子の「女らしい」心に同じ女性として鮎さんは共鳴する。「国籍と境遇と氣質を越えて」通じる「ほんとうの女の心」により彼女はやす子に謝罪した。三郎の『日本人と善良なる支那人とは地上にあつて最も親しかるべきものだ』の言葉通り、二人は和解となったが、うつむいたまま「ペロリと舌を出した」鮎さんでもあった。

【39～43】

快復したアンは上海へ渡り、従兄弟と結婚することになった。アンからの手紙で、行方不明であった鮎さんの夫が、サラワクへの出稼ぎを経て上海で暮らしていることがわかる。次いで夫からの直接の手紙で、彼が長崎に南京料理店を出すことを知った鮎さんは、共に暮らすために山田家を去る。しよげかえる三郎。そんな折、千代子が来訪し、ワートルとよし子が密会の上、有馬温泉旅行の計画を立てていることを知らせる。

【44～49】

やす子と三郎は千代子と共に六甲山へ向かい、ワーターとよし子を尾行する。三郎は物陰からよし子を呼び止めると、彼女を引き摺り下山する。一方、やす子と千代子に見つかり、千代子が「掠奪」されたことを知ったワーターは意気消沈。よし子にダイヤモンドの指輪など様々な金品を貢いだことを告白し、改心を誓う。三郎は自宅によし子を連れ帰ると、やすもち半分で説教を加える。よし子は、自分は西洋人に媚びているのではなく、自分が遊んでやっているのだと開き直る。

【50～55（完）】

口論の末、山田家から蹴り出されたよし子は、何食わぬ顔でワーター家を訪ねる。帰宅したワーターは彼女を映画『嘆きの天使』のヒロイン（ローザ・フレリッツヒ）に例え、彼女を追い出してしまふ。よし子は山田家を再訪、やす子と千代子を交え、三郎と和解する。メリーは、結婚したアンが自分と遊んでくれないと淋しがり、『夫婦つて、あんなに一緒に居るものでせうか』と嘆く。一方、全てを告白されたワーター夫人は『何もかも話すこと、一番よろしい。夫婦の間に秘密があつてはいけません』と澄ました顔で言った。「だれもみんな幸福に、平凡に、なつたようですな」との（語り手）の言葉で、物語は閉じられる。

率直に言えば、他愛のない内容である。夫婦間のモラルは驚くほど侵犯されるが、それが深刻なドラマ、修羅場をもたらすわけでもなく、「平凡」に収束していく。まさに「その日その日を五分間ほど楽しめる読み物」と言える。我々もいま、当時の読者のように、愉快に読み流すことはできるが、「作者の言葉」を踏まえ、また「大陸新報」という媒体を踏まえることで、この『神戸の女』なるテキストを特徴づけることもできるはずだ。

三、『神戸の女』を読む

本章では『神戸の女』の内容について、同時代性および「大陸新報」という媒体のありようを踏まえた上で、三つの項目について考察しておこう。

・中国の「友」へ

岡は「出て来る二、三の支那の人に実在の人名を拝借」とするが、『神戸の女』で直接的に登場する中国人はメイ・ンキャラクターである「鮑曾麗詮」ただ一人である。名前のみの登場として、彼女の夫の恩人である「王盛春」、その友人でありアンに鮑氏の消息を教えた「劉」なる人物がある。

「王」「劉」に関しては不詳だが、「鮑曾麗詮」については幾らか知ることはできる。作中での彼女の境遇は、上海の薬屋の娘でインテリだがなんらかの事情により神戸で家政婦をしている、夫はサラワクへ出稼ぎに行つた際に日沙商會（言うまでもなく実在した企業であり、ゴム園の経営などに携わつた）の日本人「林」に助けられ親日に、やがて長崎で料理店の経営に乗り出す、というものだが、実在の鮑夫妻はやや異なる。

先に挙げた岡の略年譜のうち、一九二六年七月に再注目して欲しい。須磨に集つた芸術家として名前が挙げられた「鮑少游夫妻」が恐らくそれで、夫の名は「少游」、「曾」は麗詮の姓である。

鮑少游（一八九二～一九八五）⁶⁾は画家（墨絵、山水画など）、横浜で生まれ、西京美術大学を卒業、後年は中国文化協会理事も務めた。曾麗詮は正しくは「曾麗銓」、一九一七年に鮑と結婚している。一九三三年には神戸市の「麗精社」から『西湖物語』なる書籍を出版している。また、朝日新聞社から出された説話のアンソロジー『山の伝説と情話』

(一九二二年)『海の伝説と情話』(一九二三年)にそれぞれ寄稿していることが確認できる。これらに、岡が関わっている可能性は高い。『神戸の女』において「鮑さん」が三郎に中国の説話・民俗にまつわる書籍を貸し与えていたのは、実在の曾麗銓がそうした話題に明るかったことを反映しているのであろう。鮑少游は一九二七年には香港に渡っているため、その機に彼女も日本を去ったのではないだろうか。

『神戸の女』は「少し歪められた御自分の姿を何かのはづみに、この新聞で御覧になりはせぬかと、はかない望みを持つて」書き始められた。「筋だのテーマだのにハッキリしたもの」がないこの小説だが、こうしたささやかな志向はあった。だとすれば鮑とやす子を和解させようとした三郎の『日本人と善良なる支那人』とは地上にあつて最も親しかるべきものだ』(37)という言葉はあながち読み流すわけにもいかない。一九三九年、蒋介石に対し和平を模索する汪兆銘らの動きが注目されていた状況を踏まえれば「善良なる支那人」という限定的な表現は、暗黙の裡に抗日派を除外したものととして読めるが、いずれにせよそこには第一に「親しかるべき」という願望があった。岡の、今はどう会えない友への情が垣間見えるところだが、「大陸新報」という媒体に掲載されたとき、また異なる意味を持つてくる。すなわち、日中の協働の必要性を暗示するのである。

小説中の「鮑さん」は、当初こそアンの家政婦でしかなかったが、次第にやす子の恋敵になっていく。その性格も、弱気なやす子と対照的に常に強気・勝気であり、準主役と言って差し支えない。彼女がこのように位置づけられたのも、実在の鮑曾麗銓の印象が岡にとつていかに強かったのかを伺わせる。一方、「大陸新報」という媒体にあつて、日本人と敵対しつつやがて和解する中国人の造形は、対中の国策に適用ものでもあり、「家政婦」であるところに上下関係が読み取られもする。岡の友情——思慕とも言つていいだろう——に偽りはあるまいが、「大陸新報」という媒体側の要請がどこまで働いたのか、ということについて一考の余地はある。

・夫婦の恒常性
ホメオスタシス

『神戸の女』において岡が描こうとしたのは、外国人同士であっても「仲よし」になれる女性の気質である。「四角張つて張り合」う男性たちをよそに、たとえ相手が外国人だろうと「国籍と境遇と気質を越えて」仲良くなれる、という女性認識によって、鮑のみならずアンやメリー、ワートル夫人やサハイ夫人といった外国人が登場する世界観が確立されている。すなわち神戸とは、女性の友情によって成り立つ土地なのである。先にも触れたが、岡の親交という人間関係への意識はなかなか強い。「仲よし」という概念は『神戸の女』のキーワードだと言ふことができるだろう。

そんな「仲よし」の重視は、女性同士の交際に限らない。元より作中、女性たちの関わりはやがて〈夫婦〉という関係性を巻き込むものにもなっていくのだ。『神戸の女』における〈夫婦〉について言及してみよう。

当初から山田夫妻、ワートル夫妻が登場し、やがて鮑さんに夫が存在することが判明し、アンも結婚することとなる。鮑やよし子によって山田・ワートル両家に危機が訪れるが、それが解決され、一応の平和が訪れる、それと共にアンは結婚し、鮑もまた夫のもとへ身を寄せることをもって「だれもみんな幸福に、平凡に」なつたとされる。すなわち本作において夫婦とは、出発点であり帰結である、一つの完成形・完全形と捉えられている。

『神戸の女』の登場人物たちは、多くの物語にしばしば見られるような、欠損を抱えその充足を目指して行動する人々ではない。既にある充足を守り、保つために物語は進行する。夫婦という単位を守る恒常性が作品世界を支配していると言えよう。しかも、起こされる事件はごく些細な上、危機に対して何者かの大胆な行動を喚起するものではない。

やす子と三郎、やす子と鮑、あるいはアンと鮑、三郎とよし子など、対立の局面においても、その和解は極めて簡

易である。「まるで親友同志のやうに仲がよすぎる」(5)『夫婦つて、あんなに一緒に居るものでせうか』『夫婦の間に秘密があつてはいけません』(55)とたびたび夫婦の絆の強さが強調され、しかもそれは『お前は全的にすぎだから特別にすぎとは思はないのだ』(37)と、男女間の恋愛関係や性的関係をまったく離れ「仲がよ」という関係性で括られる。だからこそ、よし子と三郎の夫婦喧嘩(20)はワートルに「これでみんな仲よしになりました」と仲裁される。

岡は「自分の家庭ではほんの少しヒステリックでもある平凡な奥様で、年中愛する良人といがみ合つてゐる」ことも執筆意図に連ねている。「年中」すなわち夫婦の不変・永続が大前提としてある。实在の人物をモデルにするせいもあるが、その恒常性の付与こそが、谷崎をして「華美で甘つたるい」と言わしめた原因であろう。

夫婦の恒常性はまた、世界の恒常性も保障する。夫婦が円満だからこそ、登場人物たちは皆「仲よし」でいられるのだ。作中の神戸という土地の、様々な国の人々が交流する華やかさの根底には、富裕層の家内円満が据えられているのである。

こうした恒常性は、岡の娯楽小説観を見る上で重要であろうと思われる。他方、夫婦という単位を中心に据えたこの小説を、戦時の国体意識の一環として見ることも間違ひではあるまい。作中、ワートル家には二人の子供がいるとの設定がなされている。子供たちは直接には登場しない。しかし、夫の浮気発覚後も余裕のある態度を示すワートル夫人は、子供のいない山田家に対し、一枚上手の人物として造形されている。山田家も「仲よし」であれば、いずれは子を授かるかも知れないが、小国民を生み育てる「夫婦」という単位的重要性が、国策新聞「大陸新報」の中でこそ活きたのではないだろうか。

また、看過できない点は、目まぐるしく変わる時代状況の中にあつて保持される恒常性が、我々の目に、ある意味

で白々しく映るといふことだ。実際、時代設定は昭和十年代当時でありながら、作中の神戸の姿は、大正期～昭和初期を思わせる。結局は、岡や、谷崎や、鮑曾麗銓が共に暮らした大正末期が下敷きとなっているように見える。過去の姿を恒常性あるものとして描くとは、どういふことだったのだろうか。

・「なつかし」き神戸

岡は「神戸の女」を「なつかし」むために本作を書くのだと述べた。当時、彼は既に神戸を離れ、東京で暮らしていた。また小説を読むのも上海の新聞購読者たちであった。共に神戸から遠く離れた作者と読者にとって、作中の神戸、そして女たちは回顧されるものとしてあった。

しかし、時は一九三九年。世界を二分する大戦は目の前に迫っていた。『神戸の女』に登場する在留外国人たちの故郷は、奇しくも第二次世界大戦の折、連合国側に与することになる。オーストラリア人のアンも、カナダ人のメリーも、オランダ人のワーター夫妻も、イギリス領インドのサハイ夫人も、やがて皆、政治的な論理のもとでやす子たちの〈敵〉となる。日本人と中国人も、『地上にあつて最も親しかるべきものだ』という三郎の願いに反し、〈国際都市〉上海の外では、日中戦争の火花を激しくしていく。先述のように和平も模索されるが、三郎が鮑さんに淡い思いを寄せる小説欄のその上では、「我精銳、猛然突撃 廬山の頑敵掃滅」(一〇六号・四月十九日)「成都・重慶を大空襲」(二六一号・六月十三日)などの剣呑な記事が踊っていたのである。そして、ナチスドイツのアドルフ・ヒトラーの勇ましさや喧伝され、世界大戦の影もまた立ち現われてくる。今日、我々はこのテキストを、神戸という都市における一時代の終焉、末期の幻燈とも読めてしまふ。

仮にもジャーナリストであった岡が、迫りくる時代の波、女たちの「仲」を引き裂く国際規模の対立を予期してい

なかったものだろうか。定かではないものの、たとえ予期していても、岡はやはり同じ『神戸の女』を書いたのではないだろうか。作者・読者ともに回顧される神戸は、言い換えれば共同幻想のようなものだ。今や現存するかわからず、また永続の見込めないものを、現存し永続すると信じる共同幻想を持ちかけることにこそ『神戸の女』の執筆意図はあったのだろう。それが「なつかし」むという岡の言葉に込められたものではなかったか。

そしてまた、それは上海に対する幻想でもあったのだろう。上海と神戸は「国際都市」という言葉を介して結び付けられる。日本人と中国人、ばかりでなく様々な国家・民族が同居する土地、という安易なイメージ。そこで「国籍と境遇と気質を越えて」「仲よし」になろうという願望。「国際都市」という束の間の幻影が、『神戸の女』の成立を喚起したのではあるまいか。「だれもみんな幸福に、平凡に、なつたやうですな」と作品を締めくくった岡は、持ち前の楽観的性格のためか、日米開戦後も戦勝を疑わなかったようだ。彼の作品世界における「仲よし」「幸福」「平凡」の素朴な図式が、どこかへ置き去りにされたのか、それとも彼の中で密かに残っていたのか、それは今やわからない。岡は昭和二十年五月、空襲のショックと心臓脚気のため没した。かつての同胞たちとの戦いの、その終焉を見ることはできなかった。

おわりに

『神戸』の女は史的に重要な位置にあるテキストでもなければ、文学的な企みに満ちたテキストでもない。しかし、岡成志の人間性・作家性の発露と、「大陸新報」という媒体の性格が奇妙に響きあった結果、極めてグロテスクなテキストとして完成している。戦時中の娯楽小説の一例として興味深い。

注(1) 谷崎潤一郎『三つの場合』(中央公論)一九六〇年十一月 中央公論社)

(2) 「雑草園丁」とも名乗る岡の、神戸付録への執筆頻度は高く、例えば一九二四年八月から九月を例にとると、八月二十五日は芝居「幡随院長兵衛」の感想を「岡十津雁」名義で、九月八日は神戸にまつわる語彙をディケンズに倣い風刺的に解説した「神戸百科事典抄」を「十津川亭雁行」名義で、九月十五日は宝塚大音楽会にちなんだ記事を「園丁」名義で書くが、出演者ザヌッタ・ロビニーに関する記事かと思いきや、その弟子が読んだとされる小説の話題という奇妙な内容になっている。九月二十二日にはロシアに旅立った画家・今井朝路からの手紙を「園丁」名義で紹介、九月二十九日にはアメリカの白人至上主義団体K・K・K (Ku Klux Klan) についての記事を「O・T・G抄訳」(Oka Totsu Gam)として掲載している。多様な記事を、表現形態に変化をつけながら旺盛に執筆していたことが伺える。

(3) 大谷晃一『仮面の谷崎潤一郎』(一九八四年 創元社)

(4) 現在は、ゆまに書房発行のマイクロフィルム資料として確認できる(二〇〇九年十一月刊)。本稿は関西学院大学図書館所蔵のものに基づく。

(5) 創刊号第一面「発刊を祝す」において、陸軍大臣・板垣征四郎は「日本の新聞であると同時に中国民衆の新聞であるとの自覚」を持つよう命じている。

(6) 呉志良／楊允中主編『澳門百科全書』(一九九九年十月 中国大百科全書出版社)「鮑少游 (Bao Shaoyou)」項 (やまもと あゆむ・関西学院大学大学院文学研究科研究員)